



商標登録で
“企業防衛”

確かな提案力

我々弁理士が親身についてご相談にじます。

井澤国際特許事務所

RIE MAKOTO KAN MOGI SHOKO



2026年「ミス日本みどりの大使」に永田愛実さん！



2026年「ミス日本みどりの大使」永田愛実さん

（一社）ミス日本協会が主催する「ミス日本」各賞の一つである。同大使は、未来に繋がる豊かな緑を守り育ててきた取り組みや、生活に根ざした日本の木の文化を尊び、みどりや木とのふれあいを通じて、みどりと木への親しみを広める役割を担う。具体的にはメディア等へのパブリシティの促進、イベント等における注目度の向上、さら

2015年からミス日本コンテスト事務局と林野庁、(公社)国土緑化推進機構が連携してスタートした「ミス日本みどりの大使」(2022年までは、ミス日本みどりの女神として、そして2023年よりミス日本みどりの大使に改称された)は、

にはその若さや美しさから森林や木の新たな価値や重要性をわかりやすく発信することも期待されている。

森を舞台に、想いを「伝える」

今年の「ミス日本みどりの大使」に選ばれた永田愛実(ながたまなみ)さんは、海と山に囲まれた長崎県長崎市出身で、山登りや海遊びに親しんできました。幼い頃から親しんでいた長崎を象徴する山王神社では、戦争を乗り越えた「被爆クスノキ」が枯死寸前の状況から力強く復活しています。平和教育を経て被爆クスノキの姿を改めて捉え直し、みどりの力強さと不屈の生命力を実感したと話しています。現在は日本大学法学部の2年生ですが、将来は表現者として芸能の道を志しており、これまでもミュージカルやモデル、役者としての経験を重ねています。高校時代には長崎県の高校野球イメージガールに就任しました。単にお飾りではなく、足繁く球場へ通い、球児の想いや努力を聞き出し、生放送の番組内で現場の声を伝える役割を担いました。この時の経験から「伝える」表現の奥深さに気が付きました。現場に足を運び、人と真摯に向き合い、五感で感じたことを自らも表現できるような表現者を目指しています。趣味のひとつの映画鑑賞は年間100本近くも視聴。中でも最も好きな映画は「タイタニック」であり、単なる恋愛映画ではなく、

登場人物たちが自分の人生を選択する尊い姿を、人生の教訓として捉えています。将来はタレント、映画など表現を通じて人の心を動かせる俳優を目指しており、「みどりの大使就任を機に、森を舞台に、多くの現場で働く人々と真摯に向き合い、彼らの知恵や技、想いを「伝える」役割に全力投球していきます」と。そんな「表現者」としての彼女の将来像は「声を通して人と人との心を繋ぐ伝え手でありたい」。その想いは座右の銘の「感謝の心で、言葉に温もりを」からも伝わってきます。

参考：(公社)国土緑化推進機構HP



2025年「ミス日本みどりの大使」佐塚こころさん(左)と

「木育サミット in 東京」



開会セレモニーで挨拶する特定非営利活動法人芸術と遊び創造協会の多田千尋理事長

去る1月28日、四谷区民ホール(東京都新宿区)に於いて、第13回「木育サミット in 東京」が開催された。一木に親しみ、木を活かし、木と共に生きていく「木育」の活動を多くの方に知っていただくための木育サミット。今回は、日本初のウッドスタート宣言自治体である、東京都新宿区での開催となった。新宿区では、2011年度から14年間継続して、区内で誕生した赤ちゃんへ誕生祝い品として木のおもちゃを贈っている。そのおもちゃは、「新宿の森」が所在する長野県伊那市、群馬県沼田市の木材を使い、地元の木工職人によって丁寧に製作されたもの。都市部に住む子どもたちへの木育活動が、どんな効果を生み、どんな広がりを見せているのか。「東京の木育」の生きた情報を紹介した。

まず主催者の認定NPO法人 芸術と遊び創造協会・多田千尋理事長が「今回の開催場所となる新宿区は、ウッドスタート宣言第1号の自治体です。2011年、区内で誕生した木のおもちゃを贈られた当時の赤ちゃんは今ではもう中学生です。これまでにおよそ3万個の木のおもちゃを

配布した都市の木育活動が、どんな効果を生み、どのような広がりを見せているのか、これまでの歩みを振り返りながらその成果と課題を共有し今後のウッドスタートの展望を探りたいと思います」と開会の挨拶を述べた。

持続可能な社会のために

続いて来賓者の一人目、吉住健一新宿区長が「新宿区での開催は2015年以来の二度目となり、再び本区にて木育をテーマに議論を深める機会を得られましたことを心より光栄に存じます。本区は2011年に全国で最初にウッドスタート宣言を行った自治体でもあります。本サミットが未来を担う子どもたちの健やかな成長と、持続可能な社会の実現に向けた新たな一歩となりますことを切に願っております」と挨拶。

二人目の来賓者・小坂善太郎林野庁長官は挨拶で、「我が国には、先人の営々とした努力により築かれた人工林資源があり、その多くが本格的な利用期を迎えています。〈伐って、使って、植えて、育てる〉森林資源の循環利用のサイクルを確立することで、2050年ネット・ゼロの達成に貢献し、持続可能な社会を構築していくことが重要です。林野庁では、木材を社会の様々なところで使っ

ていただく〈ウッド・チェンジ〉を推進するにあたって、木との触れ合いを通じて木材利用の意義を学ぶ〈木育〉は、「木の街」をつくる都市と森をつなぐ重要な取組です。このサミットを契機に、全国で木育がさらに広がることを期待します」と述べた。

木育の現代的意義を語る ～木育は地域活性化の切り札になるか～

森林という豊かな地域資源をどう活かし、地域の活性化につなげるか。これは多くの自治体が直面する重要な課題だ。一方で、都市部では地球温暖化の防止や水源の安定供給など、森林の多面的機能を維持する取組が求められている。その観点から、法政大学社会学部教授・信州大学特任教授の茅野恒秀氏をコーディネーターに、小坂善太郎林野庁長官が「都市と森林を繋ぐ木育について」、(一財)地域活性化センターの林崎 理理事長が「木育と地方創生―に魔法はない」とのテーマでそれぞれ基調講演を行った。また、実践報告として芸術と遊び創造協会主催者から、ウッドスタート推進部・高野祥代部長が「東京おもちゃ美術館“つなげる木育”の現在地」と題し、同美術館の発足経緯から現況までの報告を担った。(2ページへつづく)



ウッドスタート宣言第1号となる新宿区の誕生祝い品。長野県伊那市にある「新宿の森」の材が使われている。



林野庁長官も参加した基調講演&トークセッション